
酒井抱一草花図の画風形成

——寛政期草花図「月に秋草図」(MOA美術館蔵)の着想をめぐって——

新井ゆい(学習院大学)

江戸後期を代表する絵師酒井抱一(1761~1828)は尾形光琳に私淑し、琳派画風に江戸好みを合わせた独自の草花図を描いた。抱一が草花図を本格的に描き始めるのは、隅田川河畔に移住した寛政期(1790~1797)以降であり、琳派画風を用いた初期作と位置づけられているのが、MOA美術館蔵「月に秋草図」である。本図は、たらし込みを用いた草花や銀泥の月など、技法や表現の源流を検討する視点で考察されることが多く、時節や主題に託された意味については、十分に検討を加えられてきていない。

本発表はモチーフの組み合わせに注目し、各モチーフが当時どのように認識されていたのかを確認した上で、本図に影響を与えた先行作品を考察する。更に、制作期前後の抱一の周辺状況と照合し、制作意図に対して新たな解釈を加え、抱一の草花図がどのような周辺環境のなかで形成されてきたのかについて、試論を提示する。

本図は、夏の朝を象徴する朝顔と、夜を象徴する月、秋を表す秋草が共に描かれている点で特異である。この点は、抱一が学んだであろう俵屋宗達や光琳、そして伊年印の草花図に見られない特徴である。ところで、俳諧集『朝顔百首狂歌集』と『牽牛花百首』では、朝顔は早朝8時以前に閉じ始める花として詠まれ、朝顔と共に詠まれる月は有明の月として認識されている。朝顔や月に対する江戸後期のこのような認識を鑑みるならば、本図は、中秋の晩の〈月に秋草〉を描いた図ではなく、初秋の早朝の草花図であると考えらるべきであろう。すなわち、本図は旧暦7月から8月頃の微妙な移ろいの時節を描いているのである。

また、未詳であった朝顔が絡みつく植物は、南蘋派の秋草図との比較から、これが女竹であることが判明した。つまり、本図は画風を琳派に倣いながらも、主題選択は南蘋派に影響を受けており、酒井家居住期に吸収した主題と画風が源流となっているのである。

抱一は、文化12年、光琳百回忌に際して「観世音像」や「瓶花図」を描いている。どちらも、光琳の祥月である6月の草花を挿した瓶が見られ、光琳の菩提を弔う供花としての性格が託されている。また「三五夜中新月色／二千里外故人心」(『白氏文集』)の一節の如く、古代より文芸において月は、古き友、亡き人を思い起こすモチーフとして扱われてきた。寛政元年(1790)7月中旬、抱一の兄であり南蘋派の絵を学んだ酒井宗雅(1756~1790)は大病のため数え年36歳で急死した。抱一の自筆句集『軽挙館句藻』第一巻「梶の音」には、宗雅の一周忌に詠んだ朝顔の句が見られる。以上、7月から8月頃への移ろいを描く本図「月に秋草図」は、兄・宗雅の追善供養として描かれたと考えたい。

寛政期の抱一は、琳派のみならず酒井家で学んだ南蘋派や他諸流派を柔軟に取り込み、画風を作り上げていったのである。